

# 京の夢 大坂の夢

渡部 武

I

「江戸いろはかるた」の最後は「京の夢大坂の夢」、絵札は若者が冠を被り太刀を持っている凶柄です。江戸っ子の青春の夢が結ばれて、「江戸いろはかるた」は締めくくりがつけられています。夢を見、夢を描き、夢を解き、夢を追い、夢に生き、夢を生きる。成るか成らないかはともかくとして、夢は人生の生きがいの因、若者はもちろん黄金の夢を、年輪を重ねた者はいぶし銀の夢を生きたいものだと思います。

夢占、夢合、夢知、夢解、夢流、夢判、夢評定、夢祭、夢判断。辞書からちょっと気になる夢で始まる言葉拾ってみました。これらを見ると、人間は昔から随分と夢を気

にしてきたものだなあと 생각합니다。

昔に比べると今の人は夢をあまり気にしなくなってきたようにです。でも、ドクター・フロイトが夢の本質や機能を解明し、夢解釈の方法によって、私に気付かれずに私を動かしている内なる私がいるんです、気を付けた方がいいですよなどと語り掛けてきて以来、今の人が夢との関係は一層緊密かつ深刻になっていとも言えそうです。

とはいうものの、見るものあまたある中で、折角見た私の夢です。大事にして自分の人生に移せたら、大変楽しいのではないかと思います。

夢を生きた人として、偉すぎるのが難点ですが、「性、相近し。習えば相遠し」に希望を託して、時代順に孔子様、明恵上人、デカルト先生に登場願って、「夢を生きる」こ

との素晴らしさを伺い、幾分なりともあやかることが出来ればと思います。

「聖人は夢を見ない」そうです。熱血漢孟子が孔子を聖人に祭り上げて以来、聖人孔子の像はふくれあがり、天高く舞い上がってしまいました。だが孔子は自分を君子に擬して努力を重ねました。聖人ではない孔子はもちろん夢を見ました。

孔子は晩年に次のように述懐しています。「甚だしいかな、吾が衰えたるや。久しいかな、吾れ復た夢に周公を見ず」と。「故きを温ねて新しきを知る」ことを心がけた孔子は「述べて作らず」をモットーに自らの思想を築き、実践に移して行きました。その孔子の夢枕に周王朝の社会と文化を作り上げた周公旦の姿が度々あらわれました。孔子は周公の夢に励まされ、周公の跡と再現しようとして、周公の夢を生き抜きました。

魯国の政治の再建の夢が破れた孔子が、「東西南北の人」といわれ、時には「喪家の犬の如し」と侮られながらも、「桓魋の難」、「匡の畏」、そして「陳・蔡の阨」の危難を凌ぎ、十有四年にわたる亡命流浪の生活を、しかも弟子たちを率いながら続けることが出来たのも、その故と言えましょう。

宋の国で桓魋という貴族が大木を切り倒して孔子を圧殺しようとしたのが「桓魋の難」です。そのことを知った孔

子は「天、徳を予れに生せり。桓魋其れ予れを如何」と、少しも動じる様子はなかったといえます。

魯の將軍陽虎がかつて匡の地で乱暴を働いたため、衛から陳に行く途中、匡で孔子は陽虎と間違えられて襲撃され、門弟たちも散りじりになるという有様でしたが、危く難を逃れました。この「匡の畏」にあった孔子は「天の未だ斯の文を喪ばざるや、匡人其れ予れを如何」と毅然たる態度であったといえます。

「陳・蔡の阨」というのは、孔子の一行が南方の楚に行こうとして、陳と蔡の国境付近で遭遇した事件です。一行は両国の軍隊に囲まれて立ち往生、食糧は尽き、飢え疲れ果ててしまいました。この時、短気で一本気の子路は「君子も亦た窮すること有るか」と憤懣をぶつけましたが、孔子は「君子固より窮す。小人窮すれば斯に濫る」と、子路を慰め、かつ励ましました。

古希、孔子の「心の欲する所に従つて矩を踰えず」の歳に手が届こうとして、孔子は郷里に帰り、その生涯の最後の五年を門人たちに囲まれて、彼らの教育に専念し、後事を彼らに託することになりました。しかし、息子の鯉の死、大きな期待を掛けた最愛の門人顔回の死、最も親しみ愛した子路の壮烈な戦死は老いた孔子にとって大きな打撃であったに違いありません。周公を夢みなくなった老孔子は、「三子の手に死なんか」の思い通り、やがて門人に見取

られながら、静かな死を迎えたのでした。

## II

ここで一六五〇年ほど一跳びしてわが国の明恵に話を移します。時は平家から源氏を経て北条氏へ、そして承久の乱における公武の衝突というような激しい変転のうちに推移し、聖俗両界は混乱を極め、庶民の生活は『方丈記』が報じているような悲惨窮まりないところまで落ち込んでいったのです。明恵は、空海によって真言宗の前段階にして天台宗の上位と評価されながら、伝灯の地位を確立して教勢を誇る平安二宗と、上下の尊信を急速に集めつつあった鎌倉新仏教との前に影の薄くなった華嚴宗を再興し、崩れさろうとする戒律を再建することに努めた高僧です。

明恵が夢を解き、夢を書き留め、そして夢を生きたことでは、古今東西にその比を見ることが出来ないほどです。最初に書き留められたのは、幼くして両親を失った明恵が高尾の神護寺に入山、出家した九歳の夢です。「死にたりし乳母、身肉段々に切られて散在せり。その苦痛、おびただしく見えき。」というのがその夢です。この夢に対して、「此の女、平生罪深かるべき者なれば、思ひ合せられて殊に悲しく、いよいよ能き僧に成りて、彼等が後生をも助くべき由を思ひとり給ひけり。」と書いている。明恵は少年の時のこの思いを六十年の生涯を掛けて果たして行きまし

た。

四十歳の冬に明恵は『摧邪輪』を、翌年には『摧邪輪莊嚴記』を著して、専修念仏を批判します。世間の風評に関わらず、法然を信頼し尊敬していましたが、法然の『選・撰本願念仏集』を読むに及んで、その内容が経論を読み誤っているために、人々を欺き迷わし、浄土往生の行を主旨とするといいがらかえって往生の行の妨げになっているとして、厳しい批判の書を著しました。惜しいことには、法然は『摧邪輪』が書かれた年の正月に没しています。明恵の論難は、専修念仏が、仏教の信仰と救済の原点ともいべき人間の菩提心を全く不必要なものとして無視している点と、自力に立つ聖道門の諸宗、南都北嶺の八宗や禪宗などを群賊呼ばわりしている点との二点に絞ってその誤りを衝いています。

この頃から明恵の夢に女性がしばしば登場するようになります。それも美しく端整な女性たちです。「夢に五六人の女房来り、親近して予を尊重す。此の如き夢想多々也。」そして、「一屋の中に端嚴なる美女有。衣服等奇妙也而るに、世間之欲相に非ず。此の貴女と一处に在り。無情に此の貴女を捨つ。此の女、予を親しみて遠離せざらむ事を欲す。予之を捨てて去る。更に世間の欲相に非ず。」

やがて明恵は女性との性的結合を夢で体験します。

「一大堂在り。其の中に一人の貴女有り。面兒おもてふくらか

をにして、以ての外に肥満せり。青きかさねぎぬを着給へり。女、後戸うしろどなる処にして対面。心に思はく、此の人の諸様、相見あひま。一々香象大師の釈と符合す。其の女の様など、又以て符合す。悉く是れ法門なり。此の対面の行儀も又法門なり。此の人と合宿、交陰す。人、皆、菩提の因と成るべき儀と云々。即ち互ひに相抱き馴れ親しむ。哀憐の思ひ深し。」

同じ時期の夢か。「一八九なる女房有り。術無くむつまじげにて來たる。予曰はく、弁（明恵）が右に副ふて寄り懸かり給へと。あはれみかなしく思ひて、はたらかずと思ひ、痛はしく思□云々」と。

このころ明恵は既に梅尾うめおの高山寺に住持して、朝野の深く尊信するところとなっていました。そこへ承久の乱です。後鳥羽上皇を中心とする討幕の軍は、北条政子と執権北条義時の下に団結した幕府軍に大敗し、後鳥羽・土御門・順徳の三上皇は配流になりました。敗れた朝廷方の武士は命を助かるうと梅尾に逃げ込んできました。彼らをかかまう明恵を、怒った鎌倉武士は六波羅探題北条泰時のところに引立てていきました。明恵は、仏道に従う身として当然のことのべ、「是、政道の為に難儀なる事に候はば、即時に愚僧の首をはねらるべし」と言い切ったということです。朝廷に仕えていた女官や公卿の妻女も難を逃れ、保護を求めてきました。彼女たちを、明恵は先に述べた夢に

あったように、心を込めて抱き留めたことでしょう。不安と恐怖におののき、あるいは親しい者を失って悲嘆に暮れる女性たちは、明恵の懐に慰めと安堵を見出しに違ひありません。それは、明恵が夢を解き夢を生きようとする営為と、仏教の真実に迫ろうとする修行が一体となって開けてきた「阿留辺あろへ幾夜いくや宇和うわ」の境涯から、自ずからに流れ出るのであって、泰然自若として豪も動じない枯木死灰のような在り方とは全く異質です。明恵のような「夢を生きる」達人を先輩を持つことは日本人の誇りであり、かつ幸せこの上ないことです。

明恵と同じ年に生まれた親鸞は、丁度三十年長生きしました。親鸞は、明恵とは違って、法然に絶対随順し、「たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ」とまで言い切っています。その親鸞が法然の専修念仏せんじゆぶつに帰する直前のことです。比叡山を下りて、京の六角堂に参籠し、あと五日で満願という日の暁、夢のなかで救世観音きうせくわんからのお告げがありました。「行者宿報にて設たてひ女犯にょはんすとも、我は玉女の身と成りて犯せ被られむ。一生の間、能く莊嚴しょうげんし、臨終引導して極楽に生ぜしめん」と。

やがて親鸞は伴侶恵信尼をえて結婚に踏み切ります。宗教改革の口火を切ったルターがかって修道尼だったカタリナ・フォン・ボラと結婚するより三〇〇年以上も前です。

親鸞は法然の教えを更に深めて、絶対他力の信仰に達し、報恩感謝の念仏を勧め、農漁村に生活し、寺院を持たず、半僧半俗の境涯を愚禿に生きました。このような親鸞の中に「夢を生きた」また別の一生を見ることが出来ます。

### III

さて話とはびます。軽薄短小の現代生活を支える力の一つコンピュータの第一号機を作ったのはフランス・モラリストのパスカルです。彼と同時代同国人で少し先輩に、デカルトは当たります。時は北方ルネッサンス時代、近代の曙とは言いながら、宗教改革とそれに伴う三十年戦争の混乱、落体の法則や地動説を始めとする自然科学上の発見発明とそれに対する教会の弾圧というように、歴史的な過渡期に特有な混乱がヨーロッパを覆っていました。世の中は「三銃士」が活躍するにはうってつけの舞台になっていました。生まれつき虚弱で、学校の寮生活で朝寝を特別に許可されたデカルトでさえ、無頼の宮廷騎士予備軍をもって自認するダルタニャンたちに備えて、剣術を身に付ける必要に迫られるといった具合でした。後年オルレアン街道で恋敵きに襲われたとき、応戦して相手の剣を奪うという武勇伝に、その成果が実証されています。

当時フランスのエリートが集まるラフレーシ学院に学んで、デカルトが発見したのは、数学を除いて他の学問はみ

な不確かな基礎の上に作られており、到底信用できるようなものではないということでした。デカルトは卒業すると、やがて書物を捨て、世間という大いなる書物に学ぶため旅に出ました。フランス、ドイツ、オランダ、イタリアの間を頻繁に旅し、その間オランダの都市の中での隠者としての生活を送ります。

この間の武勇伝を紹介しましょう。旅の途次、従者と二人で乗った舟の中で、市場廻りの商人と間違えられ、船頭たちが金を奪って二人を海に投げ込もうと物騒極まる相談していたのを、運よく聞きつけたデカルトは、頃をみはからって剣を抜き、船頭どもを震えあがらせ、無事にオランダに帰りました。剣術がデカルトの身を護ったわけです。

旅の人デカルトが目指したのは、真の学問を約束する基礎と方法、それに彼自身の人生とを発見することでした。このデカルトが二十三歳の秋、ドイツの片田舎ドナウ河畔の村ウルムに滞在中、炉部屋で一連の三つの夢を見ました。彼は自ら夢を解くことをしました。

第一の夢は、道を歩いていると、幻影に脅かされ、強風によってラフレーシ学院の壁に吹き付けられたが、周りの人たちは皆平気な顔をしていたというものです。第二の夢は、雷鳴に驚いて目覚めると、部屋中に火花が降ってくるのを見たという夢です。第三の夢は、辞書と詩集があり、詩集をとってアンソニウスの二つの詩、「在り、しかして

在らず」で始まる詩と「われ、いかなる人生を歩むべきか」という句で始まる詩を捜したのだというのです。

デカルトは夢を次のように解きました。第一の夢は、自分が悪しき靈につきまるとわれたことを示し、第二の夢は、真理の靈が自分に臨んで昔の罪を除いたことを意味し、第三の夢で、辞書を捨てたことは多くの知識の寄せ集めから成る学問を捨て、詩集と手にしたことは真の知識と学問への関わりを示します。すなわち、真偽の区別を与える理論的学問と、生き方を示す実践的知恵とを見出し出したことを示している、デカルトは解きました。これによってデカルトは真理の靈が彼に宿り、真の新たな学問を自ら見い出す仕事を彼に課したこと、ここに人生の如何に生きるべきかの途が示されていることを確信しました。

真理の探求にのりだしたデカルトは、ほんのわずかの疑いでもかけることの出来るものはすべて、絶対に虚偽なるものとして投げ捨てるという、いわゆるデカルト的方法的懷疑に徹底した結果、かの有名な第一原理「我思う、故に我あり」を発見しました。「思う我」換言すれば「理性的自我」から人間の歩むべき人生の在り方と、人間の置かれている世界の紛れもない確かな姿を明らかにしようと試みました。前者の試みは理性的主体としての個人を生き抜く近代ヒューマニズムの源泉の一つになり、後者の試みは自然の解明と征服にあくなき意欲を燃やす近代科学が展開

する一つの大きな源泉になりました。

重厚長大の時代を経て短小軽薄の今日に到る間、人間の生活は豊かになり、福祉の向上には目覚ましいものがあります。それらはデカルトの真理探求の努力とその成果に負うところが極めて大です。デカルトは夢を見、夢を解き、夢を生きることで、自分の人生を素晴らしいものにしたばかりか、人類の進歩と福祉に大きく貢献しました。まことに夢を生きることは素晴らしい。

ところが、二度の世界戦争や今日の地球規模の環境問題に集約的に表現される事件に遭遇して、いま人間は近代ヒューマニズムと近代科学に不信の眼差しを向けるようになり、デカルトをその元兇として断罪しかねない勢いですが、近代ヒューマニズムと近代科学に限界があり問題を内在させているということは、それら自体に関わることであって、なにもデカルトが責任を取らなくてはならないということではありません。近代ヒューマニズムと近代科学を絶対化して、それらを疑うことを忘れた近現代人こそ責任を問われなくてはならないはずで

今我々は夢を余り気にしなくなり、軽くあしらうようになりました。夢が非現実の世界にとどまるものであればそれもよいでしょう。しかし孔子、明恵、デカルトについてみますと、夢は大切にされた方がよいようです。この三人には夢を見る前に何かがあるようです。といっても「性、

相近し」ですから、それは天賦の才というようなものではなく、万人に共有といえましよう。

であれば、わたくしたちも夢を見、夢を解き、夢を生き、「江戸いろはかるた」の最後の絵札のように、しかしもう少し恰好よく、行き着くところまでいってみたいものです。

〈注〉

(1) 「京の夢 大坂の夢」の解釈

「夢物語をする前に、かく言いて後に、語るものなり、と言えり。」(太田全斎)

「占より明解無し。無境漂蕩<sup>むじょうひょうたう</sup>、定まり無きを云うか。或いは曰く、京に在って夢みる時はかえって大坂を夢むという意。」(幸田露伴)

「京ならぬ今日の夢は、大坂ならぬ逢うことの夢であれかし、というまじないの意味を聞こうとしている。」(池田弥三郎)

「京は伏見の京橋を夜立ちして、翌朝未明、大坂八軒家に着く船中の夢ではないか。目がさめてみりゃ大坂になっている。淀の夜明けに国々のゆめ」(佐藤要人)

なお、「上方いろはかるた」では「京にゐなかりあり」

(2) 築地のつら、道のほとりに、飢る死ぬるものたぐひ、数も不知。取り捨つるわざも知らねば、くさき香世界にみち満ちて、変わりゆくかたちありさま、目も當てられぬこと多か

り。いはむや、河原などには、馬・車の行き交ふ道だになし。あやしき賤山がつも力盡きて、薪さへ乏しくなりゆけば、頼むかたなき人は、自らが家をこぼちて、市に出でて賣る。一人が持ち出て出たる價、一日が命にだに不及とぞ。(中略)また、いとあはれなる事も侍りき。さがりがたき妻・をとこ持ちたるものは、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。その故は、わが身は次にして、人をいたはしく思ふあひだに、稀々得たる食ひ物をも、かれに譲るによりてなり。されば、親子あるものは、定まれる事にて、親ぞ先立ちにけり。また、母の命盡きたるを不知して、いとけなき子の、なほ乳を吸ひつゝ、臥せるなどもありけり。

(3)

「阿留辺幾夜宇和(あるべきようわ)」とは「らしく」という意味。「人は阿留辺幾夜宇和と云ふ七文字を持つべきなり。僧は僧のあるべき様、俗は俗のあるべき様なり。……此のありべき様を背く故に、一切悪きなり。」

「あるべきようわ」が「貞永式目」に反映されて、日本人の生活に結び付き生きること全般を律する日本人の考え方の根本に大きい影響を与えてきたといわれる。(山本七平『日本の革命の哲学』・河合隼雄『明恵 夢に生きる』)

(4)

「デカルトの第一の夢：道を歩いていると幻影が私を脅かし、右側からくるその圧力のため、進もうとすると身体を左側に傾げざるをえない。何とか立ち直ろうとすると激しい風が吹いて私の身体は数回転した。倒れそうになりながらも、なお進んで行くと、行く手に学院が見えた。救いを求めてその中

に入っ行き、祈るため学院の教会堂に行こうとする。そのとき、知人が挨拶もせずに通り過ぎたので、後戻りしてこの男に挨拶しようとしたが、とたんに激しい風が吹いてきて壁に押し付けられてしまふ。と同時に、中庭にもう一人の男が現れて私の名を呼び、丁寧な言葉で、もしN氏に会いに行くなら差し上げたいものがあると言う。私はそれをメロンだろうと思う。驚いたことには、その間、私は相変わらず風の中でよろめき倒れそうになっているのに、この男もその廻りにあつまつて来た人も、皆平気な顔をして立っている。

(ここで目が覚め、二時間ほどして眠りにつく。)

第二の夢：雷鳴のような音に驚かされて跳び起きると、部屋の中をたくさんの火花が降ってくるのが見えた。

(夢であることを確認して、安心して三度目の眠りにつく。)

第三の夢：机上に本がある。開いてみると辞書だ。その時、もう一冊の本に手が触れた。詩集で、開くとそこに「ワレ、イカナル人生ノ道ヲ歩ムベキカ」の一句が読めた。すると見知らぬ男が現れて「在リ、シカシテ在ラズ」で始まる詩を擧げ、いい詩だと言ひ、その本を何処で手に入れたかと尋ねる。私はどうして持っているのかわからないし、最初にみた辞書も消えていたので、誰が持ってきて誰が持っていたか分からないと答える。そうすると辞書が最初に見た時とは違った不完全な姿で現れた。その間、私はこの男の詩句が見いだせないで、アンソニウスの「ワレ、イカナル人生ヲ歩ムベキカ」で始まるもっと美しい詩があるという。男の所望で探し

始めると、様々な木版の肖像画が現れてきて、どうも先ほどの詩集とは違うような気がする。ここで本人も消えてしまふのだが、私は夢の中で夢の解釈を始める。辞書は「総合された学問」、詩集は「統合された学問と知恵」、「ワレ、イカナル人生ヲ歩ムベキカ」は「賢人の忠告、または道德神学」を示すと解釈できた。

(ここでデカルトは平静に眠りから覚めた。)

#### 〈参考文献〉

『いろはかるた』(太陽 別冊 1974年冬)

平凡社

岩波文庫

講談社学術文庫

金谷 治 『孔子』

新潮社

井上 靖 『孔子』

岩波文庫

河合肇雄 『明恵 夢を生きる』

岩波書店

白州正子 『明恵上人』

新潮社

奥田 勲 『明恵―遍歴と夢―』

東京大学出版会

デカルト 『方法序説』

岩波文庫

田中仁彦 『デカルトの旅/デカルトの夢』

岩波書店

野田又夫 『デカルト』

岩波新書

(わたなべ たけし・日本思想史)